深淵に立つ癒し姫

雁緒　采加

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
深淵に立つ癒し姫

【Ｎコード】
Ｎ７２５０Ｘ

【作者名】
雁緒　采加

【あらすじ】
４０歳女が転生を果たしました。ユリアナ伯爵令嬢５歳です。
平穏な生活を送る予定だったのに元義理の息子に求婚されました。
って前世から５０年たってるはずなのに何故２０代なのでしょうか？
それに息子よ５歳の少女に求婚するのも世間的にどうかと思います。

プロローグ

亡国の王は『力』を欲した。

他国への侵略のため
他国へ自国の脅威を見せつけるため
より多くの富を得るため
戦に続く戦で民は疲弊していた

王のもとに一人の男が現れる
魔導師を名乗る男は告げる
強大な『力』を王の手に献上してみせようと――――

その為に生贄が必要だった
魔獣の骸、無垢な子供達の魂、そして異邦の乙女の鮮血

魔導師の言いなりに王は次々と生贄を集める
ある者は王を諌め反逆者として処刑され
ある者は己の保身の為子供達を集め生贄に差し出した
国を守るため多少の犠牲は仕方がない王宮に住む者は皆考える

しかし魔導師が示す『力』は王の為のものではなかった
強大な『魔』を生み出す為魔導師は『力』を欲し王を利用したのだ。

だが、魔導師によって強大な『魔』が生み出されることはなかった。
異邦の乙女の祈りにより『力』は共に贄となっていた子供達に渡される

乙女の死と引き換えに――――――

彼らは『力』を使い魔導師を滅ぼす
しかし魔導師は己の命をもって『魔』を生み出す陣を発動させる
陣は大地深く刻み込まれ　力は弱いが多くの『魔』が生まれ出てきた

『力』をもってしても滅しきれない『魔』に彼らは仕方なく陣の周
りに封印を施す
深い深い森で覆い、『魔』が出てこられぬように、陣が人目にふれ
ぬように

贄として集められた者たちは虐げられた民と共に決起し王家を廃し
新たな国をつくりあげた
『力』を得た子供の一人が建国の王となる
新たな王は１０歳に満たない少年であった――――――

ユーテリアス国建国記より

転生したようです

はじめに感じたのはまぶしい光
それから暖かな温もり
波のようにゆらゆら揺れる体が気持よくて瞼をあげれば――――

・・・だれ？この金髪のおじょーさん。
ってゆうかなんでこんなに手が小さいんだ自分。
いや、手だけじゃない、体が思うように動きません、声も出ません。
生まれたての赤ちゃんになっているようです。
どうやら転生というものをしてしまったようです。

――――――というわけで
声は「あー」とか「うー」しか出ませんが目と耳は問題ないようで
フル活用した結果。

私の今生の名はユリアナ＝フィールゼン。
アルシャン国の伯爵令嬢だそうな。
伯爵といっても出世に興味がなく領地を村人と楽しく開拓していこうという父様の意向でのんびりゆったり暮らしているようだ
両親と数人の使用人と共に王都からかなり離れた辺境の地で暮らしている
１０歳年の離れた兄がいるらしいが王都の学院に入学しているため家にはいないとのことだ。
私が初めて見たきれいなお嬢さんはやはり母様でした
光り輝く金色の髪とエメラルドの瞳、白磁の肌。

はっきり言って超美人さんです。
１０歳の息子がいるとはとても思えません。
特に声がとてもきれいで子守唄など聞いているだけで幸せになってしまいます
ちなみに父様も金の髪、ダークブルーの瞳のイケ面です
まだ自分の顔は見れませんがちょっと楽しみです

前世の記憶が正しければアルシャン国は国民のほとんどが金髪碧眼
だったはずなので母様の浮気（ありえない）がなければ私の髪も金髪のはずでしょう
もと黒髪、黒目の私としてはうれしい限りです

転生前のわたし

ユリアナ3歳になりました

今はベットの上で絵本をよんでいます。
どうやら私には魔力というものがかなりあるらしく幼い体には負担が大きく熱を出してはベットの住人です。
前世の記憶というのもどうやら悪影響を与えているようで膨大な記憶が幼い脳では処理しきれずショート。
高熱に魘され寝込む。の繰り返し
おかげで3歳までの記憶は曖昧です。
まあ、あまり思い出さないほうが精神年齢４０歳のおばさんにはいいような気がします。

ようやく魔力も体に馴染んできて高熱で魘される事もなくなりだし、両親や他の人とも言葉でコミュニケーションがとれるようになり色々な情報が入ってくるようになりました。

どうやら今住んでいる処は前世での私の終焉の地の近くのようです

私はもともとこの世界の住人ではなかった－－－－－
地球の日本という国で小児科医をしていてあの頃は忙しくても毎日が充実していました
ここに召喚されるまでは・・・
もう今はない国の王は『力』を欲したらしい、その為に異世界の住人の生贄が必要だったのだそうだ

突然連れてこられ、閉じ込められた。
儀式を行うその時まで

でも、そんな愚かな王にもまともな臣下だっている
国の安寧の為に異界の者が犠牲になる事はないって城から連れ出してくれた
元の世界には戻せないが守ってやる――――と

召喚の時に魔導師に付けられた印によって私はこの国を出る事が出来なかった。
彼は国の辺境にある友人の元に私を連れて行ってくれた
力のある術師らしく、彼の息子（いや～息子がいた事にはびっくりした～）を預けていたらしい。
私に付けられた印を消すことはできなかったが感知されないように封印してくれた

それから数年は平和だった
辺境の村までは追手が来る事はなく。私は彼にプロポーズされ、いきなり8歳の子持ちになっちゃったけど本当に幸せだった。

魔導師（あいつ）が来るまでは――――

突然村に現れた魔導師は次々と村人を殺して行った
村の子供たちと私は儀式に必要だからと捕えられた
彼も戦ったが魔導師の手によって殺されてしまった
私たちの目の前で――――

魔導師は儀式を行うと言って陣を描き始めた
私にはなんの力もなかった。魔導師を阻止する事も子供たちを守る事も

せめて子供たちだけでも守りたい！
ーーーーそう願った
魔導師の作りだす刃が私の胸に突き刺さって、あたり一面に鮮血が
飛び散り大地に書かれた陣が輝きだした
かすれゆく視線の先には真っ青な顔で泣き叫ぶ息子(あのこ)がいた
ーーーーごめんね、巻き込んでしまって。守れなくって。

それが私が覚えている最期

それからの事は転生してから知った
この絵本もその一つ
５０年前に起きたこの事件をもとに書かれた英雄王物語

あの子たちは『力』を得て魔導師を倒したそうだ
そして虐げられた民の為に新たな国を創った
あの時にいた息子(あのこ)の幼馴染の二人がユーテリアスの初代王、王妃と
なって子供達までいるんだそうだ
風の噂では国は安定し、国王夫婦の人気はすさまじい程なのだそうだ
つらい過去だけど今、みんなが幸せであってくれればうれしい

しかし息子は表舞台にはあまり出てこないらしく、今どうしている
のか分かっていない
一体どうしているのか、少し心配です
義母(はは)としてはもう少し大きくなったら様子を見に行きたいものです

母はどの世界でも強いのです

「まあユリアナ、またその絵本を読んでいるの？」

今日もベットの住人となった私の様子を見に来た母様は呆れ顔で手元の絵本に視線を向けてきた

「はい、おかあさま。だって、えいゆーおうさまたちかっこいいです」

なるべく三歳児っぽく、かわいくかわいくと心に念じながら（この気づかいが知恵熱のもとなんだろうなぁ）笑顔で返事をします

「本当にユリアナはそのお話が大好きね」

ええそりゃあもう！

だって3歳児じゃあこの絵本ぐらいしか彼らの事を見る事ができません

子供向けにはなっていますが本人たちをちゃんとモデルにして書かれているようで赤髪の戦士、銀髪の英雄王、精霊王妃はあの子達の顔を思い起こさせます

赤髪のやんちゃな息子、ガーディアル。知的で頑張り屋のライナス。おっとりしたやさしいレイティ。

「でも絵本はお熱が下がってからにしましょう」

母様は絵本をサイドテーブルに置くと私をベットに横たえると子守歌を歌ってくれます。

子守唄を歌う時の母様の瞳はエメラルドの瞳の中に金色の輝きが見えます。
歌も素敵なのですがこの瞳がとても綺麗で私はいつも瞳を眺めてしまいます。
最近知った事なのですが、この輝きは癒しの力を使う時に現れるもので母様は子守歌を歌いながら私の体調が少しでも良くなるようにしていてくれたのです。

あ、ちなみに私の髪も金色で瞳は青と碧を混ぜたような色でした
母様似の顔のおかげで自分で言うのもなんですが中々の美人になるにではと思っております
思わず鏡の前でガッツポーズをして侍女に変な目で見られましたが・・・

「リステリア、ユリアナは眠ったかい？」
ノックと共に父様が入ってきました。
まだ眠くはないのですがとりあえず寝たふりをしときます
「ええ、あなた今眠ったところよ」

母様と入れ替わり今度は父様が頭をなでてくれます
父様の大きな手が気持よくて本当にウトウトとしてきました

「あなた、前にお話しした魔術の先生の事ですが」
「ああ、しかしユリアナにはまだ早いのではないか？まだこの子は3歳だ」
「でも、この子の魔力は特殊です。このままでは体がもちません。大変かもしれませんが早く魔力のコントロールを出来るようにならなくては」

なんですとっー！
思わず起き上がりそうになる体を必死で抑え、両親の会話を聞いていきます
眠気なんてぶっ飛びましたよ

どうやら私の魔力は母様から受け継がれたようなのですが、母様曰く何かが違うようだとの事です。
母様にも分からないので専門の魔術の先生について勉強をしたほうがよいと
母様のように癒しの魔力を持つ者は稀な上、魔力に飲み込まれ精神に異常をきたす（怖っ）のだそうだ
３歳で早くも勉強なんてと父様は躊躇しているようですが母様の強い主張によって王都から家庭教師として魔術師がやってくる事がきまったようだ。

なんにせよ早くも勉強の毎日になりそうです。知識は必要ですから早いのはいいことです
廃人は嫌なので魔術のコントロールは特に頑張りたいと思います
前世では魔術なんて使えなかったから少し楽しみですね

先生がやってきました

魔術師の先生が王都からやってきました
カイゼル＝アラート先生です

青白く光る瞳、つりあがり気味の目尻が少し冷たい印象を与える知的イケメン眼鏡男子様です
首元で一つに括られた金色の髪にはところどころに白い物体が・・・・２０歳と聞いていたけど若白髪っ！まさかの若白髪なのかぁ！！・・・と思ったらどうやら生まれつきだそうです。
ご本人より説明を受けてしまいました
不躾にガン見してしまってごめんなさい

「伯爵夫人たっての願いによりまいりましたが、私が見る限りご令嬢には魔力を感じられませんね」
自己紹介もそこそこにアラート先生は私を一瞥するとはっきり断言してくださいました
えっ？じゃあ今までの高熱はやっぱり知恵熱？
そもそも魔力って感知できるものなの？あっ魔力を持っている者同士ならわかるのかな
母様は魔力を持っているから私の中にある魔力を感じて先生を呼んだんじゃ・・・
それとも先生の特殊能力か？
う～ん気になる事は聞いてみるのが一番です

「せんせい、まりょくをもっているのかどうかはみただけでわかるのですか？」
「魔力を持つ者同士は視る事ができます。力の強いものは体にオー

ラが現れ。例え少量でも瞳を見れば分かります。魔力を持つ者は少々特殊な瞳をしておりますので。」

なるほど、じゃあ先刻から先生の周りに渦巻いていた青白いオーラは嫌々ここへ来させられた事による不機嫌オーラではなく本物の魔力のオーラってことでしょうか？

・・・あれっ？じゃあ私にはやっぱり魔力があるって事？

瞳が特殊と言ってましたが青い瞳の奥が時折白く光ることでしょうかやっぱり分からない事は聞きましょう。

相手はたとえやる気がなくても今のところは私の先生なのですから

「ーーーー私の瞳がなんですって？」

「はい、ですからせんせいのひとみにしろいきれいなチカチカがみえます。ははさまのひとみはきんいろにひかってました。」

「それが視えると？」

「はい、せんせいは、からだからもあおとしろのひかりがみえます。ははさまにはみえなかったのでせんせいのがまりょくがつよいということですか？」

先生は私の質問に答える事はなく、ものすごい勢いで両手で人の頬を挟み覗き込んできました

ちかっ！近いです！せんせっーーーー！

鼻の頭がくっつきそうな距離ってどういうこと－－－－－！

目の前に綺麗な瞳がウットリ・・・なんて場合じゃな~い！！

「・・・・なるほど」

納得したのかようやく放してくださいました

きっと自分、顔が真っ赤な事でしょう。恥ずかしさで憤死しそうです
まあ、先生にしてみれば子供の顔を覗きこんだだけなのでしょうけど・・・

「先程の言葉撤回させていただきます。ご令嬢には魔力が認められます。本来魔力は体をめぐり瞳から放出されていきます。しかし何らかの原因で瞳から魔力が放出されることなく体の中に籠もってしまい、力が体に高熱となって巡ってしまってるようです」
「自家中毒みたいなことですか」
「そうですね、その例えはいいと思います。自分の魔力に――――え？」

やばっ！声に出してたようです
先生が不審な目で見てきます

「ご令嬢はよくそのような言葉を知っておられましたね。確か御年は3歳――――でしたか？」
「このまえ4さいになりました。ははさまがそのようなことをいってしんぱいしていましたので」

子供っぽく首をかしげながら笑顔でこたえますが、冷や汗だらだらで背筋が冷たいです
こわいっ！この先生はヤバイです！！
昔（前世）の同級生にこんな目をした奴がいた
『己の探究の為なら何でもしてやるぜっ』て奴だったよな
アイツは絶対マッドサイエンティストになってるハズだ
前世の記憶がある事がばれたら絶対実験体ですなにされるか分かりません
それだけは絶対避けなくては！！

「まあいいでしょう。これから家庭教師としてお世話になるのですから――時間は存分にあるでしょう」
ニヤリと笑う先生のお顔は怖いですっ
どこぞの魔王様でしょうか・・・・
なにやら私の体の事も先生には面白い症例のようで嬉々として私の家庭教師をやるようです
もう、実験体は決定・・・なのでしょうか・・・

魔術は難しいようです

魔術の練習、一般教養の勉強を始める事になりました。
何故４歳児に一般教養？と不思議に思いましたがこれは魔術に関係しているようです。

この世界には３つの『力』がある
世界の至る所にいる精霊たちを使役する事が出来る精霊使い。
陣を描き己の少量の魔力と生贄を捧げる魔導師
己の魔力のみを糧とする魔術師

魔力を持つ者は少ない
しかもその中でも精霊使いはもっと少ない。精霊に好かれる体質、魔力が関係しているらしいのだけど精霊どんな人物が精霊に好かれるかなどは分かっていない。
魔導師は闇のもの。己の少ない魔力を補うために生贄を使う為、利己的な者が陥りやすい。
もっとも多くいるのは魔術師。才能にはかなりの差があるがもともと魔術師の絶対数が少ないのでほとんどが王都の専門の学校を出た後、王宮で働くようになるらしい

「魔力があれば魔術が使えるものではありません、魔術師は世界の『理』を知り、『源』を視て、『構築』し始めて魔術となるのです」
「ことわり、みなもと、こうちく。ですか？」
なにやら難しい話になってきました

アラート先生の話では
世界には『理』つまり法則があり『源』と呼ばれる魔術を使う為の材料がある
その材料を『構築』組み合わせて魔術を発動する・・・らしい
魔術師になるためには世界の法則にしたがい、魔力を使い術に必要な材料を集め創りだせるようにならなくてはならないということだなるほど、つまり『理』を知るために必要なのが学問であり世間の常識であったりするわけで。
あとは魔力があれば『源』と『構築』が出来るってことですねっ
はい、頭に叩き込みました

「それで、『みなもと』とはどうすればみることができるのですか？」
魔術の基本がわかったからには気になりますね
私はまだ『源』とやらは視えていません。

「ほう、たったあれだけの説明でご理解いただけたとは教えがいがありうれしい限りです」
アラート先生の目が怪しく光りますがここはもうスルーです！
聞かなかった事にして授業を続けましょう！

「『源』を視るにはまず体中に流れる魔力を感じ取り、その魔力を瞳に集中させてください。」
アラート先生もこちらの意を汲み取ってくれたのかそれとも何か思惑があるのかこれ以上はつっこむ事もせず授業を再開してくださいました

目を瞑り体に流れる魔力を感じてみます
なんだか暖かいモノが体をぐるぐる回っているような・・・これの

事でしょうか
これを瞳に集中させて、目を開けてみます

「・・・・・元素記号？」

目の前に光るアルファベットがあっちこちに浮いております
ＣＯ２　Ｈ２Ｏ　Ｎ　Ａｒ　Ｏ
こちらの世界の文字は元いたところと同じアルファベットでローマ字表記だったので言葉を覚えるよりも楽だった事を覚えている
えっ？でもこれってどう見ても元素記号？いや化学式？もあるのか？
空気に含まれる酸素や二酸化炭素の化学式ですよ・・・ねーーーーーＡｒってなんだ？
もしかしてこれが『源』？

「せんせい、もじがみえます」
「ええ、それが『源』です。」

先生が右手のひらを胸の前に差し出し呪文のようなものを呟いていきます
すると空気中を漂っていた英数字が先生の手のひらに集まりだし・・・

ボンッ！！

わっ、爆発しました！すげぇ

「『源』の性質を見極め魔力によって引き寄せ『構築』し発動させます。『源』の性質が分からなければ魔力があっても集めることは

出来ませんし、たとえ性質が分かっても魔力が足りなければ『構築』出来ません」

魔力にも性質があり火、水、土、風にそれぞれ馴染みやすい術があり『源』の視える種類も魔力によって違ってくるそうです
一般的にはこの４つの術を使うのが魔術師としての基本だそうです
その中でも母様のよう特殊な魔力を持つ者のいるそうです
先生も特殊な魔力を持つそうですがどんなモノかは教えてくれませんでした（け～ち～）

やり方もわかった事ですし私も早速やってみようと思います
とりあえず水を手のひらに集めてみましょう
元素は確かそこにあるＨ２Ｏですよね

ーーーーあれ？集まってきません
漂う英数字に手を伸ばしてみましたが触る事も出来ません
先生はさわったりできてるのに・・・・なんで？

「せんせい『みなもと』にさわれません」
「ああ、ご令嬢にはまだ無理ですね。体内の魔力を外に放出する事が出来ませんから術は出来ないでしょう。でもまあ視ることはできるようになりましたから、視る事によって魔力を消費出来ますから高熱に悩まされる事は無くなるでしょう」

なんですとー！！
せっかく魔術が使えるようになるとちょっぴり楽しみだったのに・・・
・
原因が分かるまでは『理』の勉強をがんばりましょうと笑顔で先生

に言われては頑張るしかありません

「どこまで令嬢の頭に詰め込めるか楽しみですね」

とにやり笑いと共に研究者（マッドサイエンティスト）の顔になっていたのは見なかった事にします

魔術は難しいようです（後書き）

息子がなかなかでてきません（ＴＴ）
あらすじにいつわりありですね・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7250x/

深淵に立つ癒し姫

2011年10月28日08時05分発行